

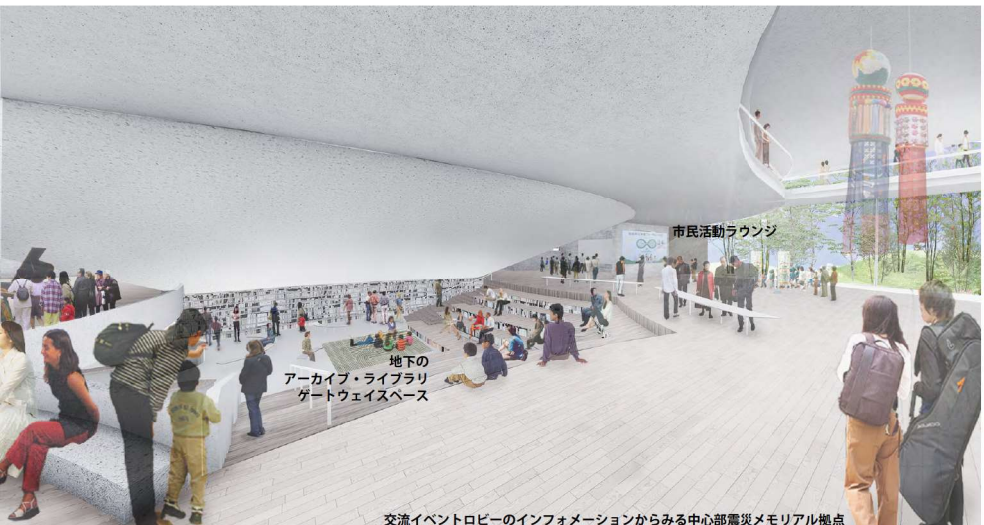
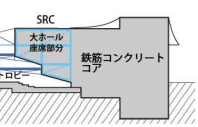
「楽都仙台」と世界、文化芸術と災害文化をつなげる杜の都の新たなシンボル
 広瀬川の河岸段丘や青葉山麓の雄大な風景と呼応する建ち方



河川敷の活用提案（要関係者協議）

1 目に見えないものに想いをさせる場所
 音楽や過去の震災など目に見えないものを感じ、その時に想いをさせ、祈る場所には、その場所の歴史をつかってきた風景と呼応する建築が求められます。伊達政宗公が仙台城を居住地に選んだ理由として、青葉山はもとより、広瀬川がくりだした天然の要害となる地形が理由のひとつとされています。青葉山麓や河岸段丘がつくりだす優美な輪が、この場所の唯一無二の特徴であり、過去と未来をつなぐ存在であると考え、敷地の雄大な風景と呼応する建築を提案します。

2 環境と呼応する構造計画
 雄大な風景と呼応する環境を室内外に作り出すこと、主機能であるホールに求められる造音性能を踏まえ、ホールを取り囲む鉄筋コンクリート造の大きなコアを建物の主たる構造とします。オーバハンダした大ホールの座席部分を支持する箇所（右図水色部）は、壁の一部を鉄骨鉄筋コンクリート造（SRC）として計画します。



5 アメーバのように活動範囲が変化する広場エリア
 広場エリアは、震災メモリアル拠点を含めて「つくる、つどう、つながる」を具体化するため、交流イベントロビーまわりに様々な活動範囲を想定し、吸音性能、コンセントや照明配置を工夫することで、アメーバのように活動範囲が変化する場所として設計します。災害文化を日常化するため、震災メモリアル拠点の「創造」「実装」機能も1階の格の小径側に配置しています。

6 文化芸術と災害文化の創造拠点、表舞台と裏方をシームレスにつなげる
 利用客用駐車場を地下1階に配置し、地下から地上への動線上に、音楽の練習室、震災メモリアル拠点の「認知」「発信」機能を配置し、交流イベントロビーと震災メモリアル拠点をシームレスにつなげます。プロ・アマが連続して活動する仙台市において、地域のアーティストの皆さま、災害文化の「創造」と「実装」に係る活動をされている方々一人ひとりを尊重しながら、表舞台と裏方をシームレスに入れ替わる使いこなし方を想定し、美しく、使いやすく、時間と共になんでもなく道具としての建築空間や備品・家具の設計を行っていくことで、活動が持続的になると考えます。

7 室内音響の変容性を確保
 公演種目による最速室内残響時間を確保するため、音響板を天井・壁面に設置し、公演種目に合わせて残響時間をアプレットできるようにします。前観でオペラ劇場設計時にも音響コンサルタントと業務を遂行した経験を活かして設計を進めます。

各階別の延床面積表

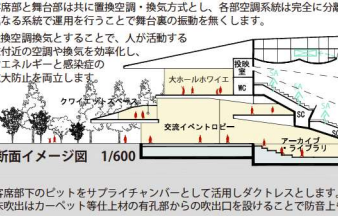
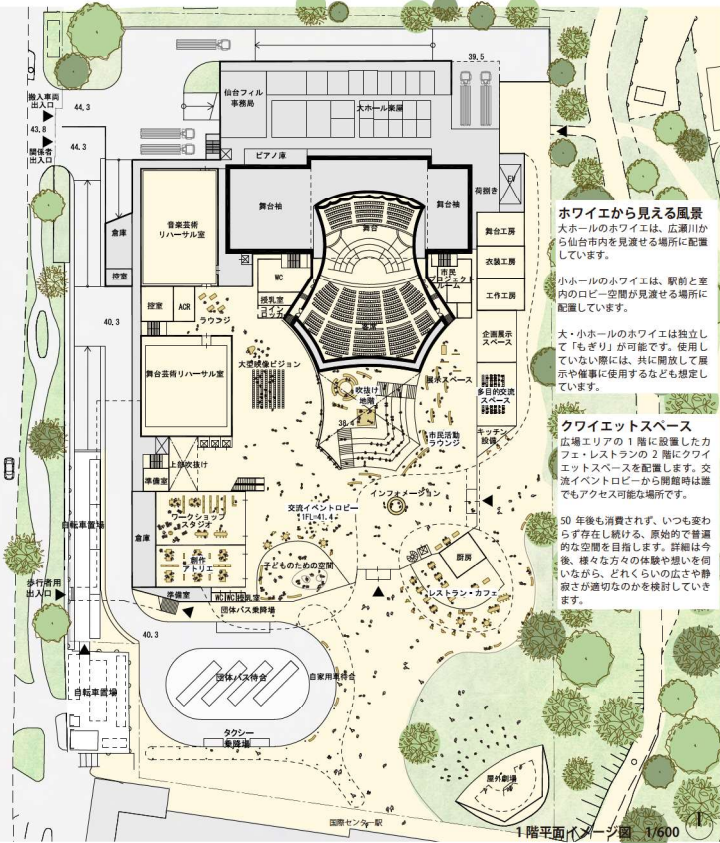
階数	名称	面積	合計
1階	大ホール（曲壁・オーケストラリブ）	774 m ²	9,864 m ²
	交流イベントロビー	207 m ²	
	練習スペース・ゲートウェイスペース	1,346 m ²	
	練習室群	778 m ²	
	その他	2,899 m ²	
2階	ホール・小ホール	2,338 m ²	5,802 m ²
	交流イベントロビー・練習コーナー等	2,838 m ²	
	交流練習スペース・観覧スペース	1,119 m ²	
	リハーサル室・ワークショップゾーン	1,713 m ²	
	管理エリア（包括的な管理）	1,197 m ²	
3階	その他	1,302 m ²	4,033 m ²
	演奏エリア	1,287 m ²	
	大ホール・小ホール・ホール・家屋	3,820 m ²	
	クワイエットスペース	207 m ²	
4階	演奏エリア	808 m ²	3,045 m ²
	その他	967 m ²	
	大ホール・ホール・小ホール	2,346 m ²	
	管理エリア	1,488 m ²	
5階	その他	201 m ²	201 m ²
6階	延床面積（駐車場含まない）	26,790 m ²	
7階	延床面積（駐車場含む）	3,756 m ²	
8階	延床面積（駐車場含む）	30,545 m ²	

大ホール内部空間（コンサート時）



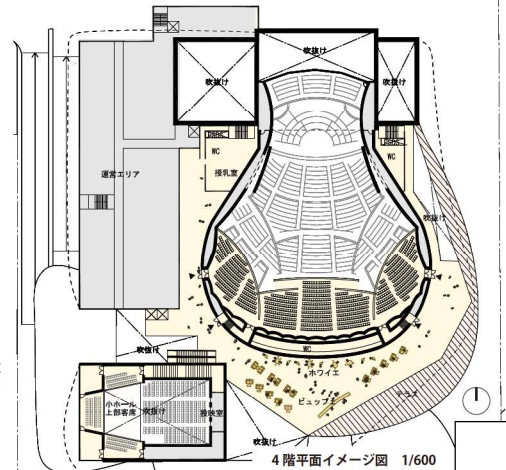
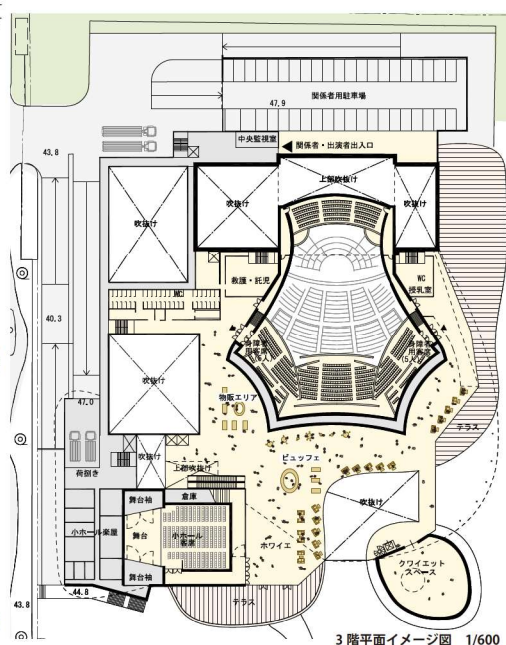
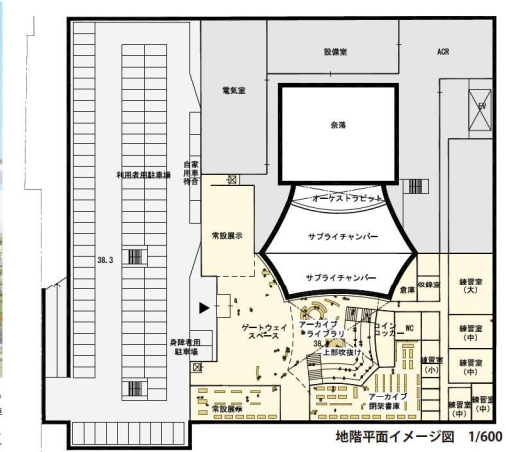
3 自由な平面計画を可能にするRCコア+鉄骨トラス
 大きな鉄骨コンクリート造のコアが有する剛性を活かして、大屋根やホール近くの床スラブは、左図で青色で示した鉄骨トラスを用いたホールからの跳ね出しとして計画し、自由な平面計画を可能とします。左図の赤色で示す建物外部の床については、青色の跳ね出し部に接続し、水平力は鉄筋コンクリートコアへ流しながら、赤色のポスト柱により支持することで、内外が連続し外部へ開いた建物の表情をつくります。

4 風景と呼応する雄大さが音楽鑑賞・観劇への期待感をつくる
 国際センター駅に降り立って見上げる際には、跳ね出した鉄骨トラスにより、浮いたように見える大屋根、垂直力のみを受ける柱による大・小ホールの小ワイエ、アラスが重なり合って見え、これらに観る演劇や、聴く音楽への期待感を感じさせます。また、交流イベントロビーに入ると、オーバハンダで持ち上がった大ホールの座席部分の裏面が見えます。その下には地下に降りるスペースが連続しており、交流ロビーと震災メモリアル拠点の活動もシームレスにつながります。



客高部と舞台部は共に置換空調・換気方式とし、各部空調システムは完全に分離します。異なる系統で運用を行うことで舞台裏の振動を無くします。置換空調換気とすることで、人が活動する床付近の空調や換気を効率化し、省エネルギーと感染症の拡大防止を両立します。

断面イメージ図 1/600



地階平面イメージ図 1/600

3階平面イメージ図 1/600

4階平面イメージ図 1/600

S4: 道具室
 RA: リタナー空気
 SC: サラライチャンバー